

### 3 本校の概要と研究の概略

#### (1) 研究主題

豊かな心と確かな学力を持ち、自己の能力を発揮できるたくましい児童生徒の育成

—— 自ら考え判断し、豊かに表現できる子どもを育む

教育課程の開発と学習指導のあり方 ——

#### (2) 主題設定の理由

子ども達が大きく羽ばたいていく 21 世紀の日本は、国際化をはじめ、地球環境の保全と変化、情報化などの課題がますます複雑化・多様化する社会になることが予想される。

こうした現実をありのままに受け入れ、心豊かに対応しながら調和を保ち、「生きる力」を子どもたちの身につけていく必要があるといわれている。

本校は、小学校児童 8 名、中学校生徒 8 名、計 16 名のへき地複式校である。子ども達は豊かな自然と地域の教育力に恵まれ、健全にすくすく育ってきている。しかし、一方では、少人数であるがための課題もある。幼い頃からお互いのことをよく知っていて、最後まで自分の思いを伝えなくても暗黙の了解で済んできており、自分のことはわかってもらえていると思いきこんでいることと、切磋琢磨する機会が少なかったことから、自己を表現する力が不十分である。

昨年度までは、異学年交流を取り入れ、教師が少しでも多くかかわり、より多くの仲間と学習する機会を生み出す単元構成や指導過程の工夫に努めたり、福祉センター訪問やちまき作りなどを通して、地域の人々とかかわり合う機会を数多く取り入れたりしてきた。

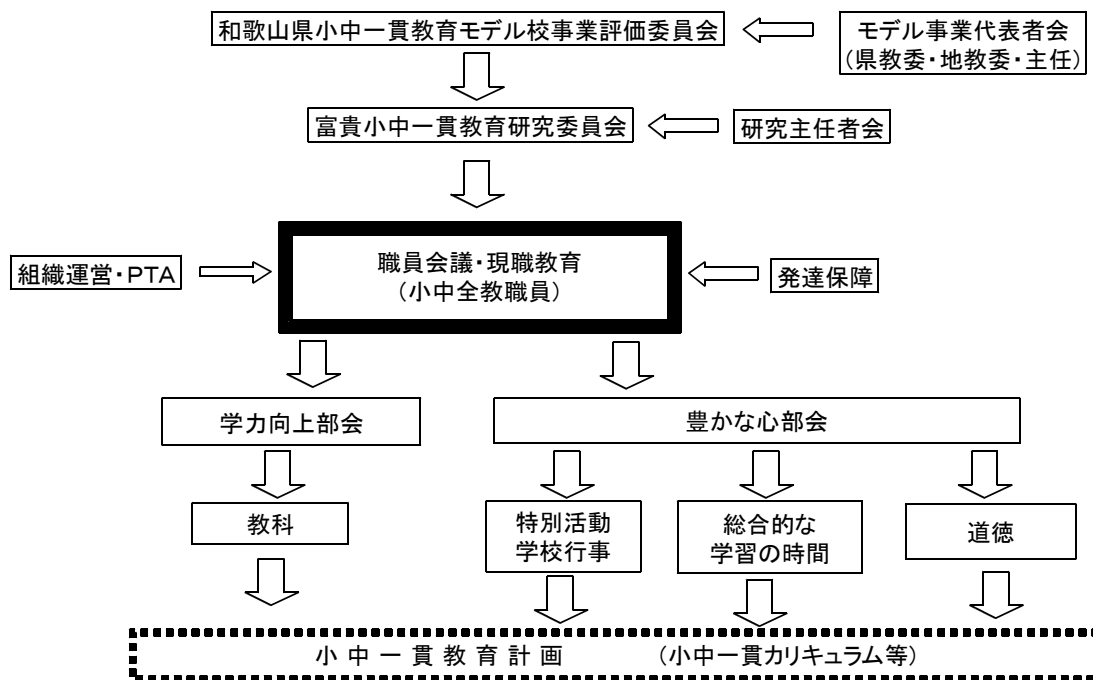
本年度も、昨年度と同様に、さらに小学校と中学校の連携を探る中で、児童生徒が生き生きと学校生活を営み、確かな学力や豊かな表現力を培いながら自己実現を図っていくことのできる小中一貫教育を創造していきたいと考えた。

本研究を通して、子ども達がより多くの人々とかかわり、学び合い、教え合い、そして様々なおもいや考え、生き方に触れ、幅広い柔軟な思考ができる人間に育つことを願い、本主題を設定した。

#### (3) 目指す児童・生徒像

- ・ 春のように温かい心で人と接することができる児童生徒
- ・ 夏の太陽のように燃える心で仕事（学習）をする児童生徒
- ・ 秋のように澄んだ心で物事を考えることができる児童生徒
- ・ 冬のように厳しい心で反省ができる児童生徒

(4) 研究組織



(5) 児童生徒数と学級・職員構成の変遷

18年度	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊	1年	2年	3年	計
学級数		1		1		1	0	1		1	
児童生徒数	0	1	3	1	3	4	0	2	4	1	19

職員構成 校長 1名 教頭 1名 養護 1名 事務 1名  
 栄養職員 (事務助手) 1名 調理員 2名  
 小学校籍教諭 3名  
 中学校籍教諭 6名 (社会、数学、理科、英語)  
 中学校籍講師 2名 (国語、保体)  
 非常勤職員 非常勤講師 3名 (英語、美術) 校務員 1名

19年度	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊	1年	2年	3年	計
学級数		1		1		1	0	1		1	
児童生徒数	1	0	1	3	1	3	0	3	2	5	19

職員構成 校長 1名 教頭 1名 養護 1名 事務 1名  
 栄養職員 (事務助手) 1名 調理員 2名  
 小学校籍教諭 3名

中学校籍教諭 4名（社会、数学、理科、英語）  
 中学校籍講師 2名（国語、保体）  
 非常勤職員 非常勤講師2名（英語、美術） 校務員1名

20年度	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊	1年	2年	3年	計
学級数	1			1		1	0	1		1	
児童生徒数	2	1	0	1	3	1	0	3	3	2	16

職員構成 校長1名 教頭1名 養護1名 事務1名  
 栄養職員1名 調理員2名  
 小学校籍教諭 3名  
 中学校籍教諭 5名（国語、社会、数学、理科、英語）  
 中学校籍講師 1名（保体）  
 非常勤職員 非常勤講師2名（英語、美術） 校務員1名

## （6）研究経過の概略

### ①平成18年度

年度当初に日課時間帯を調整して授業の相互乗り入れ体制を可能にした。次に、一貫教育体制の枠組みの検討を始めたが、既存の小学校、中学校の枠を超えることは難しく試行錯誤の連続となった。6月に避難訓練と安全教育防災計画の統合ができ、明けて1月に職員室の統合を行った。学校行事の統合を開始したが、議論多く職員会議が長引く日もあった。教育指導計画の統合に向けて作業開始し、校務分掌統合に向けて見直し作業開始、一貫カリキュラム構想の立案、そのための学習内容系統表の作成と基本カリキュラム構想を立案し作成を開始した。小中一貫を意識した授業研究には未だ手を付けづらく、研究授業等は5本のみに終わった。

### ②平成19年度

教育指導計画の統合を段階的に進めることとし、その第1弾として校務分掌の一本化を行い、教科指導年間計画では、小中一貫した基本カリキュラムを完成させた。また、教科外指導計画の暫定的な統合を行った。小中一貫を意識した授業研究は、各教師にとって取り組みやすいところから始めることとし、研究授業等計18本の研究実践を行った。さらに、学校行事の統合がほぼ完了した。小中一貫カリキュラムも年度末を目途に作成に取りかかった。

### ③平成20年度

教育指導計画の統合が完了した。教科指導年間計画では小中一貫カリキュラムを完成し、教科外の指導計画では暫定的なものから小中一貫したものへと内容書式等を改良した。特に、総合的学習での「ふるさとふれあい学習」は完全に統合が完了した。小中一貫指導計画に則った授業研究は、各教師が年間1本以上の授業研究をすることとし、現在も取り組みが続いている。

## (7) 中間報告会のまとめより

平成 19 年 11 月 16 日（金）に、80 余名の参加を得て 2 年次研究報告ということで中間発表会を開催した。発表会の形式は今回の 3 年次発表会とほとんど同じ形式で実施したのであるが、ここでは特に、全体会で出された質問や意見についてその内容及び本校の回答又は見解を記すことにする。また当日の出席者の方々にお問い合わせしたアンケートの結果（資料 1）も報告しておきたい。

**【質問 1】** 小中学生が一緒に給食が年に 3 回しかないのはなぜか。また中学校の給食開始時刻に 5 分の遅れがあるのはどうしてか。十数名の規模の学校なので、むしろ全校一緒の方がなごみがあっていいのではないか。

《回答》本校は通常小学生と中学生は給食を別々に取っている。それは、小学生と中学生とでは給食を食べる量にも時間にも相当な差があり、中学生の食事時間が短い。しかも、日課表とは少しずれるが、中学生は給食後すぐに清掃活動に取りかかり、その後の空いた時間を昼休みとして利用しようとする。そのため、中学生全員が食べ終わるとすぐに後片付けをすることになるが、この頃小学生はまだ大半が食べ終わっていない状態である。また給食開始時刻の 5 分の差は、日課表調整の結果であるが、中学生を 5 分遅らせることで釣り合いを取りやすい面もある。一方、年に 3 回程度のバイキング給食や花見給食は最初から最後まで小中学生と一緒に食事をする場であり、和みのある場として貴重であり大切な取組として位置づけている。

**【質問 2】** 小中一貫ということで、子ども達は幸せだなあと感じる一方で大変だなあとも思う。卒業して高校に入った生徒の追跡調査などはどうしているか。

《回答》本校の小中一貫教育は 18 年度から始まったため、19 年 3 月（18 年度）の卒業生は小中一貫研究を 1 年間だけ受けたことになる。開始当時の小中合同行事への参加、音楽科への乗り入れはあったものの効果は限定的で、一貫教育検証のための調査対象とはなり得ていないと考え、追跡調査も 19 年度段階では行っていない。

**【質問 3】** 小学校 6 年生の算数で本来の 4 コマを 5 コマで運用して 1 コマを教科担任制にしているとあるが、この 4 コマと 1 コマの学習内容の差異をどうしているのか。

《回答》1 コマを中学校教員が指導している。指導内容について、4 月当初は図形に関して、主として立体の展開図などの指導をした。今（11 月）指導しているのはサイズとか長さに関する部分で、ともに数学的な考え方を定着させる指導を行っている。それ以外にアルゴ等の数学ゲームなども使用して数学的思考力を養っている。いわゆる選択教科的な指導も行っている。

また、中学校へ来たときに分数の計算や距離・速さ・時間の問題などの計算力につながる指導を行っている。

**【質問 4】** 小学校低学年で、常に学級担任が入る T T 学習について。公開授業でも英語の授業を見せてもらったが、これらの授業に対する前もっての打合せをどうしているのか。

《回答》職員室が同じであるため、打合せには特に苦勞したことはない。多くの場合は前日に少し時間を取って打合せをするようにしているが、時として当日の早朝に打合せをしなければならない場合もある。職員室が同じであり時間を取りやすいという利点を有効に使わせてもらっている。